

平成 30 年 5 月 24 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02177

研究課題名(和文) 地域文化の活性化に資する絵画の復元研究 - 絵金「芝居絵屏風」の想定復元制作を通して

研究課題名(英文) Reconstruction of painting that contribute to the revitalization of regional culture through imaginary assumed restoration of painting "Ekin's folding painting screen"

研究代表者

野角 孝一 (NOZUMI, Kouichi)

高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・講師

研究者番号：50611084

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：絵金(絵師金蔵、弘瀬洞意)は、幕末の狩野派で学んだ土佐の絵師である。祭礼を飾るという独自の様式を確立した絵金作の芝居絵屏風が開帳される高知県各地の夏祭りは、全国的にもユニークな祭りとして注目されている。しかしその一方で、芝居絵屏風は温度や湿度などが管理されていない寺社や各地区などで保管されており、損傷の激しいものが多々ある。本研究では、調査の一環で新出であることが確認できた高知県香南市香我美町西川地区にある峯八王子宮の芝居絵屏風を研究対象とし、その大下図の制作を行った。また郡頭神社の調査では、祭礼の存続が検討される中、継続される一助として、群頭神社と芝居絵屏風の歴史をまとめた著書を発表した。

研究成果の概要(英文)：Ekin (Artist Kinzou, Hirose Toui) is Tosa's painters who studied at the Kano school at the end of the Tokugawa period. A summer festival in various places in Kochi prefecture where drawing paintings of Ekin's paintings that established a unique style of decorating festivals are opened is gaining attention as a unique festival nationwide. On the other hand, the folding screen is stored in temple shops and districts where temperature, humidity, etc. are not managed, and there are many damage cases. In this research, we studied the folding scene of Mine Hachioji shrine in the Nishikawa district of Konan City where Kochi prefecture was able to confirm that it is new as a part of the survey and produced the draft.

In the survey conducted by Korizu shrine, as the survival of the festival is being considered, as a help to be continued, we published a book that summarizes the history of the Korizu shrine and the folding screen.

研究分野：日本画

キーワード：絵金 芝居絵屏風 復元

### 1. 研究開始当初の背景

絵金(絵師金蔵、弘瀬洞意)は、幕末の狩野派で学んだ土佐の絵師である。祭礼を飾るという独自の様式を確立した絵金の『芝居絵屏風』が開帳される高知県各地の夏祭りは、全国的にもユニークな祭りとして注目されている。芝居絵屏風には忠臣蔵を題材とした連作があり、その中には下描きとなる小下図のままで屏風となっていない構想段階の作品群が存在する。本研究では、未発掘の絵金の芝居絵屏風(小下図)の画題を分析した上で、当時の彩色技法を使った屏風絵として想定復元制作を行う。そして、本研究で制作した新たな芝居絵屏風によって、祭りを通じた地域の文化継承とさらなる活性化を促すことを目的としている。本研究は、郷土史・美術史研究との連携のなかで、画家の経験と自然科学的な客観性に基いて行う学際的な研究である。

高知の各地で開催される絵金祭りに飾られる芝居絵屏風は絵金だけでなく弟子や孫弟子なども制作していた。彼らは絵金派と呼ばれ、絵金から手習いを受けるあるいは一緒に芝居絵屏風の制作を手伝う一方で、地元では家業を営みながら芝居絵屏風の注文を受けた。しかしそれも昭和の初期までで現在では新しく制作されることはなかった。祭礼では屋外に設置されるため損傷の激しいものもあり、画像が紙に印刷されたものなどで代用するなど工夫がなされている場合なども確認している。また芝居絵屏風は新しく発見される一方で、消失したものも少なくない。さらに地域文化の継承者の減少もあり、祭り自体も含めた文化の継承が危ぶまれている。調査の一環で芝居絵屏風を飾る祭礼の準備に参加した。祭礼の準備の担い手は高齢者が多く、芝居絵屏風を飾る絵馬台の設置では数メートルの高さに登りながらの作業も多く、この先何年継続できるのか予想できない状況を確認することとなった。また、祭礼の核となる芝居絵屏風の保存方法の在り方を検討する他、印刷ではない肉筆の芝居絵屏風の活用は年に一度の祭礼の存続に直結した問題であると実感した。

本研究の最大の目的は絵金の未着手であった作品の彩色想定復元制作を行い、研究成果を展覧会として発表する他、完成した作品をその後も地域に還元させることにあった。研究対象は絵金蔵に収蔵されている芝居絵屏風の数点の小下図である。これらの小下図の中には芝居絵屏風として現存しない、あるいは未着手のものがある。本研究ではそれらの小下図や芝居絵屏風をはじめとする絵金作品を対象とした模写を繰り返し、それを踏まえた彩色想定復元制作を行う予定であった。

芝居絵屏風に限らず、絵金作品は同じ小下図を基に複数枚の本画が制作されている場合があり、描き手によって作品の完成度が大きく異なる。従来、積極的に行ってこなかっ

た絵金とされる作品について、模写を行うことによって運筆などの表現の特徴について分析した。

また想定復元制作を行う上で芝居絵屏風の作品の運筆や色材、作品自体の特徴などを比較するために、高知県内に点在する芝居絵屏風の調査を行った。その一環で高知県香南市香我美町西川地区にある峯八王子宮の芝居絵屏風1点の調査を行った。かつて祭礼に用いられていた芝居絵屏風は画面の約7割が欠損していた。神社を管理されている氏子の意向により、芝居絵屏風を高知大学で引き取ることとなった。その後の調査で本作品は、高知県内のすべての絵金作品を把握する絵金蔵(博物館施設)でも把握していない新出の芝居絵屏風であることが判明した。

当初の予定では未発掘の絵金の芝居絵屏風(小下図)の画題を分析した上で、当時の彩色技法を使った屏風絵として想定復元制作を行う予定であった。しかし新出の芝居絵屏風が発見されたことによって、その屏風を研究対象とし、想定復元制作を行うことで後世に伝えいくことを最優先とした。

### 2. 研究の目的

芝居絵屏風は義太夫狂言、特に人形浄瑠璃のために書かれ、歌舞伎化された狂言が題材となっているものが多い。また同じ画題で複数の芝居絵屏風も制作されている。新出の芝居絵屏風についても画題を明らかにし、欠損部分の図像の解明とそれを基にした大下図までを制作をすることを目的とした。また、拠点となる高知大学は芝居絵屏風が管理されている郡頭神社の近くということもあり、郡頭神社棒打絵馬保存会からの相談を受け、芝居絵屏風と祭礼についてまとめた著書を執筆することも合わせて目的として設定した。

いずれの目的も芝居絵屏風を飾る高知県特有の文化を継承する上で重要であると考えられる。

### 3. 研究の方法

上述のように、高知県香南市香我美町西川地区にある峯八王子宮の芝居絵屏風の彩色層手復元制作については、科学的調査および画家の経験に基づいて行った。また郡頭神社の祭礼の準備などに実際に参加し、祭礼と芝居絵屏風の状況について検討した。

#### 3.1 峯八王子宮の芝居絵屏風の彩色想定復元制作

前述のように、高知県香南市香我美町西川地区にある峯八王子宮の芝居絵屏風1点の目視による調査を行った。絵金派の芝居絵屏風であることは目視で十分に確認することができたが、雨や動物による影響で画面の約7割程度が損傷しており、その支持体や裏打ち紙の紙片や樹木の葉、枝などと共にビニールシートに覆われた屏風の下部に堆積していた。また、床には色材が塗られた支持体の紙片が落ちており、ここまで損傷した芝居絵屏風はこれまで見たことがなかった。その後、

その芝居絵屏風を高知大学で引き取ることにした。また、平成4年に峯八王子宮が改修する際に撮影された写真を一緒にお借りした。その写真では画面の約3割程度がすでに欠損している状態であったが、大まかな構図把握できた。そこで高知県香南市の絵金蔵副蔵長(元)横田恵氏に確認したところ、画題が「伽羅先代萩 御殿」という作品であること、また絵金ではなく絵金派の手による作品ということが分かり、さらにこれまでの文献や恣意調査記録にない新出の芝居絵屏風であることが判明した。

「伽羅先代萩 御殿」は、他では高知県香南市赤岡町本町二区の外、高知県立歴史民俗資料館や、高知市朝倉宮の前奥内町内会で所在が確認されている。「伽羅先代萩 御殿」は子ども(千松)が毒まんじゅうを食べている場面、またその後小刀で刺されている場面の二通りがあり、絵金派によって頻りに描かれる題材である。芝居絵屏風を管理する峯八王子宮の氏子の話では、欠損する前の画面には、血を流した子どもが描かれていたとの聞き取りの情報を一致した。

次に芝居絵屏風自体の分析を行った。まず支持体である紙、裏打紙、屏風に使用されている骨縛りに用いられている紙について、高知県立紙産業技術センターに破壊分析を依頼し、支持体は竹紙、裏打紙は楮紙、骨縛りに使用されている紙は針葉樹のパルプ由来のものであることが判明した。尚、本来は支持体の分析のみでよいのだが、今後の資料の蓄積として裏打紙と骨縛りに使用されている紙についても合わせて分析を依頼した。また、芝居絵屏風に使用されていた支持体について同センターに復元を依頼した。

「伽羅先代萩 御殿」に使用されている色材については、SEMおよびEDSの観察・定位分析を行った。研究分担者である松島氏はこれまで20点程の芝居絵屏風や絵馬の分析を行ってきたが、資料片を用いた破壊分析を行った。その結果、赤色は水銀朱、青色は人造ウルトラマリン、緑色は緑青および花緑青などが芝居絵屏風に使用されていることが判明した。彩色想定復元制作を行うにあたって、現在市販されていない花緑青が検出された。代用の色材としてどのような色材を選択するかについては今後の課題としたい。

次に芝居絵屏風の大下図について検討を行った。前述の平成4年に撮影された写真と現存する芝居絵屏風を参考にしながら、構図の検討を行った。現存する「伽羅先代萩 御殿」には大人の人物が4名と子どもが1名描かれている。他の「伽羅先代萩 御殿」や歌舞伎に登場する人物などを比較しながら、それぞれの人物の名前を割り出した。前述のように研究対象となる芝居絵屏風「伽羅先代萩 御殿」は、子ども(千松)が毒まんじゅうを食べ、その後小刀で刺されている場面であることが判明しているため、欠損部分に描かれていた千松を、特に高知県香南市赤岡町本

町二区が所蔵する「伽羅先代萩 御殿」に描かれている千松を参考に、大下図に描き込んだ。

人物の着物に描かれている模様については、他の「伽羅先代萩 御殿」や他の芝居絵屏風などを参考にしながら、細かいところまで描き込んで、大下図はほぼ完成した。

### 3.2 郡頭神社の芝居絵屏風

郡頭神社は高知市鴨部にある神社で御祭神は大国主神である。延喜式内社であり、明治5年に郷社に列し、昭和21年神社制度の改革により神社本庁に所属している。昭和56年5月27日に御社殿および社務所が炎上した。しばらく休止していた祭礼も昭和62年の新社殿改築と共に、絵馬台も新しくして復活しました。

毎年7月21日に開催される祭礼には、8点の芝居絵屏風と4点の笑い絵が飾られる。研究の一環として芝居絵屏風を設置する数メートルの高さがある絵馬台を組む作業に大学として参加した。大学の教員の他、十数名の学生も祭礼の準備に参加したが、やぐらの組み方は口伝のみで、その場で話し合いながら手探りに行われ、地元の担い手は高齢者ばかりであった。

若い担い手がいない状況で、大学として今回祭礼に参加した。しかし年に一度の祭礼を継続させるには、学生の介入によって、地域の若い担い手が祭礼から離れてしまう危険もあり、地元の新しい担い手の育成も行っていかなくてはならない。また郡頭神社の祭礼自体を地元の方により知ってもらいたいという芝居絵屏風を所蔵する郡頭神社棒打絵馬保存会所蔵からの依頼があり、郡頭神社の歴史や芝居絵屏風の解説、絵馬台を制作した当時の逸話や、祭礼の歴史についてまとめた著書を出版した。

## 4. 研究成果

峯八王子宮の芝居絵屏風「伽羅先代萩 御殿」の分析結果については、第39回文化財保存修復学会で口頭発表を行った。郡頭神社の祭礼については高知大学教育実践研究第32号に投稿した。また郡頭神社の芝居絵屏風を中心とした祭礼についてまとめた著書「地域の絆 芝居絵屏風 郡頭神社棒打絵馬保存会所蔵を中心として」については高知新聞からの取材もあり、郡頭神社の芝居絵屏風についてより広く認識していただける機会となった。

本研究において、高知県内の祭礼に赴き、祭礼の準備などに参加する機会を得た。祭礼に飾られる芝居絵屏風は状態のよいものもあるが、損傷した芝居絵屏風を修理する余裕もなく、画像が紙に印刷されたものなどで代替するなど工夫がなされている状態であった。またほとんどの地区の祭礼の担い手は高齢者であり、芝居絵屏風どころか屋外に展示するという独自性そのものが危ぶまれており、地域文化の継承者の減少や祭り自体も含

めた文化の継承問題など、差し迫った課題であるということを改めて認識した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

野角孝一、中村るい、松島朝秀、吉岡一洋、中谷有里、郡頭神社の絵金と協働教育、高知大学教育実践研究第 32 号、2018 年、69-74 頁

〔学会発表〕(計 1 件)

松島朝秀、野角孝一、芝居絵屏風における色材分析と彩色の想定復元、第 39 回文化財保存修復学会、2017/7/2、金沢歌舞伎座(石川県金沢市)

〔図書〕(計 1 件)

武政重夫、貞廣宏高、野角孝一、吉岡一洋、地域の絆 芝居絵屏風 郡頭神社棒打絵馬保存会所蔵を中心として、2018、19 頁

〔その他〕

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

野角孝一 (NOZUMI, Kouichi)

高知大学教育学部・講師

研究者番号：50611084

##### (2) 研究分担者

松島朝秀 (MATSUSHIMA, Tomohide)

高知大学教師教育センター・准教授

研究者番号：60533594

荒井経 (ARAI, Kei)

東京藝術大学大学院美術研究科・准教授

研究者番号：60361739

高林弘実 (TAKABAYASHI, Hiromi)

京都市立芸術大学美術学部・准教授

研究者番号：70443900

平諭一郎 (TAIRA, Yuichiro)

東京藝術大学社会連携センター・特任准教授

研究者番号：10582819

##### (3) 研究協力者

吉岡一洋 (YOSHIOKA, Kazuhiro)

高知大学地域協働学部・准教授